# ー4 龍伝説と゛辺寺の名残りにみる歴史的風致

## (1) はじめに

『肥後國誌』(明和9年(1772)ごろに 整められた肥後の地誌で明治17年(1884) に増補して刊行)で「筑紫の富士」とも 紹介された金峰山は姿が美しく、熊本市 を象徴する山として市民に広く親しまれ ている。また市域南西部に広がる飽田郡 を守護する山とされ、その信仰の歴史は 古代以前にさかのぼることが分かってい る。この金峰山信仰に関わる大規模な寺



南からみた金峰山

院が池辺寺で、奈良~平安時代に建てられ、興廃を繰り返しながらも明治時代の廃仏毀釈で廃寺になるまで存在した。池辺寺はかつて存在していた味生池のほとりにあり、その味生池には悪龍が棲んでいたという。

このように長い歴史を有する池辺寺には龍伝説をはじめとした様々な伝説・伝承があり、地域には池辺寺の後身といわれる日露戦争紀念堂(池上公民館)やそこで行われる観音祭、特産品であるしめ縄作りといった池辺寺やその伝承に関わる営みが継承されている。(池上地区の製作者によるとしめ縄の表記については、「注連縄」や「七五三縄」、「標縄」を使い分けているため、ここではこれらを総称するものとして「しめ縄」を用いる。)現在でも池辺寺への思いはつながっており、平成26年(2014)には池上小学校に龍のモニュメントが設置されるなど、池辺寺に関わる新たな営みが作り出されている。

### (2)池辺寺について

#### ①概要

池辺寺は金峰山の麓の味生池に棲む悪龍を鎮めるために建立されたと伝えられる山岳寺院である。所在していたのは現在の熊本市西区池上町で、妙観山などといった金峰山の外輪山中である。池辺寺という名称は味生池のほとりに建てられたことに由来しており、池上町の地名もこの味生池にちなんでいる。伝承では和銅年間(708~715)



妙観山と東平山に挟まれた谷奥に位置する百塚 (手前の水田は味生池を埋め立てたもの)

に建てられたとされるが、発掘調査で現在のところ確認されている最も古い 遺構は9世紀のものである。天台宗の寺院であるが、当初は法相宗であった という。

池辺寺に関する遺構で最も有名なのは首塔である。百塔は首塚地区の中心部、池辺寺の本堂建物跡の背後に並ぶ 100 基の石造の塔である。塔はすでに崩れ、基部が残るのみであるが、周辺がみかん畑になっているなかで、百塔がある百塚地区中心部のみ開墾を免れている。これは「大切な場所であるため開墾しないように」という地元の言い伝えのためである。樹木が繁茂する地区であったものの、百塚という地名や地元の言い伝えから池辺寺の関連遺跡であると考えられてきた。周辺の埋蔵文化財包蔵地における確認調査を契機に百塚地区での確認調査も実施されることになり、昭和 62 年度(1987 年度)から本格的な調査が開始された。平成6年度(1994年度)には礎石建物群・百塔を中心とした地点の主な調査が終了し、平成9年(1997)9月11日に国の史跡に指定された。その後、百塚地区以外の周辺地区の調査が進められるとともに、平成17年(2005年)には百塚地区を中心とした整備の検討が始められた。整備は平成24~28年(2012~2016)にかけて行われ、百塔の復元展示などが行われている。

池辺寺は平地ではなく山中の寺院として存在したことが特徴で、堂塔や関連施設は1ヶ所にまとまっているのではなく、一帯に広く点在している。百塚地区以外には、三重塔があった堂床地区、結界のような石積みが連なっている金子塔地区、護摩行のような痕跡が確認された鳥帽子地区などがある。金峰山の信仰や修行にも関係した寺院だと考えられ、多くの伝説や伝承が残っている。

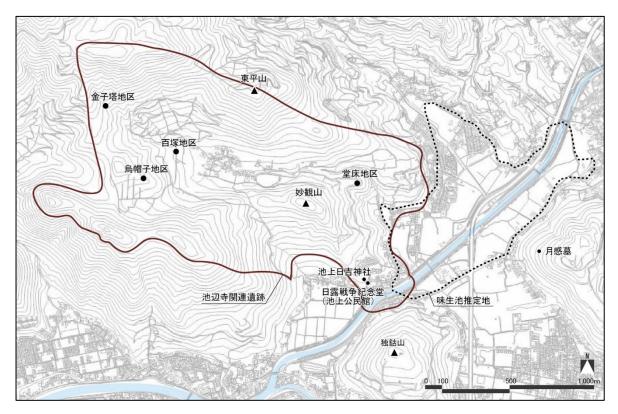
長い歴史がある池辺寺の変遷は明らかでない部分もあるが、明治3年(1870)ごろに廃寺となったときには、現在の池上日吉神社や日露戦争紀念堂がある池上地区に池辺寺は存在していた。池上地区の池辺寺のことを後期池辺寺と呼び、百塚地区に中心があったときの池辺寺と区別している。池上地区に残された石造物の年代から、遅くとも応永3年(1396)には池辺寺の中心地が池上地区に移っていると考えられている。全国的な廃仏毀釈のなかで池辺寺も廃寺となるが、その後も地元では



復元された石積みの塔(百塔)

### 第2章 熊本市の維持・向上すべき歴史的風致

流出した池辺寺の財宝を買い戻すなどし、ありし日の池辺寺をしのぶ活動が 続いている。



池辺寺関連遺跡など



上空から見た百塚地区 (整備後)

### ②独鈷山

江戸時代の地誌に記された池辺寺 の山号(寺院に付ける称号)が独鈷山 であることから分かるように、池辺寺 と独鈷山は深い関係がある。独鈷山は 後期池辺寺跡の南側、井芹川を挟んだ 対岸にそびえる円錐形の山である。前 述したように、池辺寺の堂塔は妙観山 の周囲に連なる山の中に建立されて いるが、その山々とはやや離れて独立 している独鈷山にも池辺寺に関連す るものが多く存在している。龍が天に 昇ったとされる登天石(兜率石)、雨 乞いの儀式の際に独鈷杵を洗う。妙 相 水池、石薬師像、板碑などであり、 八王子宮、山王社、妙見堂大榎、醫 ヹヺ゙゙゙゙゙ヹ 王寺、金光寺などもかつてあった。ま た、『池辺寺縁起絵巻』の第2話によ ると池辺寺の寺宝である独鈷杵は、大 同元年(806)に弘法大師が唐から投 げた3つの宝器の1つで、それが落ち てきたところが独鈷山であるとされ ている。加えて、馬場上、来迎院と呼 ばれる地区から発掘調査で見つかっ



池上日吉神社付近から見た独鈷山



池辺寺に伝わる独鈷杵(池辺寺跡財宝管理委員会所蔵)

ている。15世紀のお堂や地下式壙(僧侶の葬送施設)は、正面が独鈷山を向くように配置されている。後期池辺寺も独鈷山のすぐ近くに位置しており、池辺寺が独鈷山を意識しながら造られていることが伺える。

#### ③味生池

池辺寺の龍伝説が残る味生池は実在した池で、現在の妙観山、独鈷山、万日 では 山に囲まれた低地一帯にあったと想定されている。六国史の2番目である『続 日本紀』に味生池の記述があり、それによると和銅6年(713)から養老2年 (718)に肥後国司であった道君首名が灌漑用の池として築いたとされる。 近年の発掘調査の成果も参考にすると、元々自然に形成された湖や湿地であ ったものを、道君首名が整備して灌漑に用いたと考えられる。本妙寺の浄池 公廟碑によると、味生池は最後、熊本藩主であった加藤清正が埋め立てて田 としたという。また延寿寺の住職月感が開墾に尽力したという伝承もある。こ れにより形成された水田の風景は今も残っており、特産品であるしめ縄の材料にもこの水田から採られた稲の藁が使われている。

## (3) 歴史的風致を形成する建造物

# ①池上日吉神社

明治時代、後期池辺寺の廃寺後にその跡地に移転された神社で、祭神は大山で神である。元々は独鈷山に鎮座していた山王社(日吉神社)で、後期池辺寺跡に移転したあとに近くの石崎八幡社も合祀されている。池辺寺の天台宗は日吉神社と関係が深く、天台宗の総本山である比叡山延暦寺の守護神が日吉社の総本社、日吉大社である。『池辺寺縁起絵巻』の第5話では独鈷山に3匹の猿が現れたことが描かれているが、猿は日吉大社の神の使いであり、これは独鈷山に日吉社を勧請したことを表していると考えられる。

聞き取りや棟札の確認によると、現在の社殿は改修を繰り返してはいるものの、基本的に明治4年(1871)に移転建築されたものである。本殿は平入りで、屋根は入母屋造の銅板葺である。拝殿も平入りで、屋根の形式は入母屋造である。社殿の正面に日吉神社の鳥居があるが、石崎八幡社が合祀されているため、それとは別にもう1基鳥居がある。また後期池辺寺の跡地であるため、境内には住職墓をはじめ池辺寺に関わる石造物が多く残されている。



池上日吉神社の社殿



池上日吉神社にある仏像群







池上日吉神社神殿内の猿

# ②高橋東神社

高橋東神社はもともと天社大明神と呼ばれ、味生池を造った道君首名を祭神としている。明治初年に高橋東神社と呼ばれるようになった。

和銅3年(710)の建立であると伝えられ、『肥後國誌』には高橋村の項に 天社大明神社が若宮大明神社とともに掲載されている。昭和44年(1969)に 発行された『熊本市西山地区文化財調査報告書』には当時の社殿が延宝年間 (1673~1681)から貞享年間(1684~1688)のころの再建であると述べられ ている。現在の本殿はコンクリート製の平入りで屋根は切妻造の銅板葺きで ある。拝殿は妻入りで外壁に木目のトタンを貼り、屋根が瓦葺きとなってい る。外壁の周囲にはしめ縄が張られている。本殿外壁に昭和52年(1977)の 坪井川改修に伴う改築であると記されている。



本殿(写真奥)と拝殿



社殿と昭和4年(1929)の鳥居

境内には樹高が22.0m、目通り幹囲りが12.0mにもなる大楠があり、市指定の天然記念物となっている。樹齢は1000年以上と推定されており、この樹

が本来、高橋東神社の御神体であったとも言われる。幹にはしめ縄が張られている。

拝殿の正面には鳥居があり、これは昭和4年(1929)の記銘がある。また、大楠の脇には享保 16年(1731)の記銘がある 88 体目の放牛地蔵があるほか、年代不明の猿田彦や、享和2年(1802)の記銘がある高橋町の境界標石などもある。

# ③高橋西神社

高橋西神社はもともと若宮大明神社と呼ばれ、旧高橋村の産土神であった。 応徳2年(1085)の創建と伝えられ、阿蘇十二神に加え天照大神、住吉大神、 あめのこや ねのみこと 天児屋根命を祭神としている。

現在の社殿は、平成11年(1999)に台風18号の被害から建て直したものである。それ以前にも、寄付芳名板から昭和60年(1985)に創建900年を記念して改修されたことが分かる。他にも解読が不可能な芳名板や、大正11年(1922)に奉納された扁額があり、『肥後國史』に古い時代の改修として寛文12年(1672)の改修が伝えられるなど、古くから信仰が続いていることが分かる。

現在の本殿は平入りの流造で、屋根は切妻造の瓦葺である。拝殿は妻入りで、屋根の形式は入母屋造である。境内には鳥居や狛犬、大修築記念碑といった石造物や御神木等がある。鳥居は弘化3年(1846)の記銘があり、狛犬は昭和15年(1940)の紀元2600年記念で奉納されたものである。御神木にはしめ縄が張られており、石を根元に抱き込んだ大楠は熊本市の保存樹木に指定されている。



大正 11 年 (1922) 奉納の扁額



社殿と弘化3年(1846)の鳥居



昭和 15年 (1940) 奉納の狛犬



御神木の大楠

# (4) 歴史的風致を形成する活動

# ①追用会

毎年4月、基本的に第4日曜日に地元 自治会が主体となって行っている、地域 の戦没者、戦傷者及び新亡者の追悼法要 である。池辺寺跡地に勧請され、地域の 信仰の拠り所である池上日吉神社で慰 霊祭が執り行われ、その後池上公民館 (日露戦争紀念堂)で読経や焼香が行わ れる。明治10年(1877)の西南戦争に端 を発しており、平成30年(2018)には137 回目の開催で1614柱を祭る。



追弔会

当初からの過去帳のような名簿(巻物)が残されており、毎年前年の1年間に池上地域で亡くなった方が追記されている。平成20年代前半ぐらいまでは、戦没者に対する。忠魂碑慰霊祭と、新亡者の追弔会がはっきり分かれていたというが、戦死者の遺族の方が少なくなってきたため、近年は両者が一緒になってきている。忠魂碑慰霊祭を池上日吉神社境内の忠魂碑の前で行い、その後池上公民館(日露戦争紀念堂)で追弔会を行う。両者とも読経や焼香を主とした、遺族の方を中心に行われる法要である。忠魂碑は日露戦争以降の戦死者を記念するために建てられた慰霊碑で、50柱が祭られている。忠魂碑近くの由緒碑には昭和49年



当初から残る巻物

(1974) と刻まれている。なお、昭和49年(1974) は池上日吉神社の1271年祭 が執り行われた年である。

# ②しめ縄作り

### ア 概要

しめ縄作りは古くは江戸時代からとも伝わる池上地域の特産品である。昭和29年(1954)12月に撮影されたしめ縄づくりの写真が残っている。年中作るが、特に12月前後が繁忙期で、かつては中心部の年末の市に出していた。城下町である古町地区などでも、池上からしめ縄飾りを籠に入れて売りに来ており、それを購入して年越しの準備をしていた。現在でも市場や地元の池上日吉神社、高橋西神社、高橋東神社等だけでなく、上代、下代、河内の神社や市内の大きなホテル、市外の神社にも納めている。



高橋東神社に飾られたしめ縄



高橋東神社の大楠

池上の人はしめ縄づくりが始まると正月が近いことを感じてきたが、現在も5軒ほどがしめ縄つくりを続けている。地元の古老が幼少のころに聞いた話によると、それよりずっと昔から池上でしめ縄を作ってきており、元々は加藤清正に由来があるという話が伝わっている。

しめ縄の材料となる稲藁は、味生池を埋めることで拓かれた水田から得られるものなどを使用している。昨年のしめ縄はどんどや(正月に全国的に行われる火祭りの行事のこと。九州地方では「どんどや」と呼ばれる)で燃やされる。



どんどやの様子

# イ しめ縄の作成

しめ縄の作成は、始めに太さを出すために中央に入れる小さな藁束を準備

する。これは藁を麻紐で東ねたものである。次にしめ縄本体となる縄を綯っていく。まず藁束を左綯えでしめて細い縄を作る。このとき、中央には先ほどの小さな藁束を入れて太さを出す。さらにそれを2本作ったものを合わせて逆の右綯えにしめ、太いしめ縄を作る。最後に綱で挟みしごいてはみ出た藁等をきれいにする。しめ縄の大きさはこの工程の繰り返す回数によって変化する。



原材料



作業小屋



作業風景(左綯えに細い縄をしめる様子)



作業風景 (細い縄2本を右綯えにしめる様子)

### (5) まとめ

池上町にはかつて味生池があり、そこに悪龍が棲んでいたとされる。現在も 地元には龍伝説とともに、それにまつわる池辺寺跡等の遺跡や建物、地名、風 習等が残っている。

龍伝説のある味生池は実在した池で、近世に加藤清正により埋め立てられた。現在は埋め立てあとに拓かれた水田に、その名残を見ることができる。池上では、この水田等で収穫された稲の藁から作るしめ縄が特産品となっている。年の暮れが近づくとしめ縄作りが盛んとなり、地域の神社をはじめ市内のさまざまな場所に納められる。池上日吉神社や高橋東神社でも飾られているのを見ることができる。

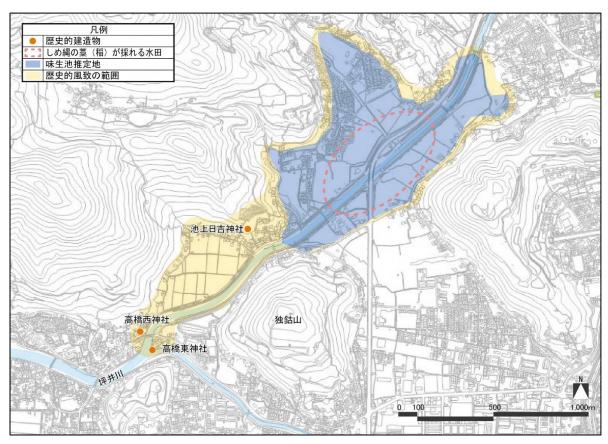
### 第2章 熊本市の維持・向上すべき歴史的風致

しめ縄づくりに加え、地域では追弔会が池辺寺跡地に勧請され、地域の信仰の拠り所である池上日吉神社を舞台に行われるなど、池辺寺に対する信仰が連綿と受け継がれるとともに、こうした活動を通して龍伝説が語り継がれ、池上小学校の龍のモニュメントなど新たな景観も育まれている。

このように龍伝説やそれにまつわる池 辺寺や味生池、歴史的な建造物と活動が 一体となり、良好な環境が形成されてい る。



池上小学校の龍のモニュメント



龍伝説と池辺寺の名残にみる歴史的風致の範囲

## [コラム]

### 〇龍伝説

池辺寺に関わる龍伝説の代表的なものは、江戸時代に成立した『池辺寺縁起絵巻』に描かれた2つの説話である。縁起の第1話によれば、池辺寺は味生池に棲む悪龍を鎮めるために、元明天皇に遣わされた大和の僧、真澄が建立した寺院であるとされる。第4話には、再び味生池に悪龍が現れ池辺寺の法具を盗んだが、池辺寺の中興の祖である仙海が法力によ



龍の鱗(市の指定文化財)

って龍を転生させ、法具を取り戻したという話がある。改心した龍は、旱魃の際に振鈴と独鈷を用いて修法すれば必ず雨を降らせると約束して昇天したという。またそのときに龍が残したという鱗が寺宝として伝わっている。

池辺寺の雨乞いの験力は有名だったようで、『池辺寺縁起絵巻』の第7話に 承暦年間(1077~1081)の雨乞いの話があるほか、江戸時代の熊本藩の記録に もたびたび記事が出てくる。

龍伝説は庶民のあいだでは大蛇伝説として伝わっている。味生池には大蛇の夫婦が住んでおり、人畜に害をなすため退治したというものである。1 匹は村人が池に放した大亀と相打ちになり、もう1 匹は加藤清正によって大砲で退治されたとされる。大砲で打ち落とされた大蛇の尻尾が落ちたところは「尾崎」、尻尾の先端が落ちたところは「谷尾崎」、頭が落ちたところは「笛崎」という地名に、また大蛇を埋めたところは「おれせんだん」、後に「蛇畑」という地名になったという。



池辺寺縁起絵巻に描かれた味生池の龍(池辺寺跡財宝管理委員会所蔵)

### 〇観音祭

地元自治会や池辺寺跡財宝管理委員会\*\*が毎年9月10日に、池辺寺の後身と言える池上公民館で行っている。仏像・宝物の公開や供養をし、ありし日の池辺寺をしのぶものである。内容は、開式、地元自治会長挨拶のあとに観音経の読経と法話があり、来賓挨拶、そして池辺寺に関する文化講演、池辺寺縁起絵巻で高に関する文化講演は現在熊本市文化振興課の職員が行っている。池辺寺縁起絵巻の解説は地元の詳しい方が行う。参加者は地元の方々が多い。

昼食を挟んで午後は池上小学校の児童や幼稚園児が訪れ、池辺寺縁起絵巻の伝説や財宝について説明を受ける。説明するのは地元の方である。

このように観音祭は池辺寺の仏像、財宝への供養だけでなく、子供も含めた地元への池辺寺に関する普及・啓発活動としても重要な役割を果たしている。

観音祭の始まりは定かでないが、追用会と同じぐらいの歴史があるとされる。 池辺寺跡財宝管理委員会につながる組織が村にできたのは、少なくとも明治40年(1907)の日露戦争紀念堂建設以前にさかのぼることからも、観音祭が100年以上の歴史をもっていることは十分理解される。



観音祭の会場



池辺寺縁起絵巻の解説



小学生への池辺寺伝説の説明

# ※池辺寺財宝管理委員会について

池辺寺がなくなって140年以上が経つ(2018年現在)が、地元では池辺寺 跡財宝管理委員会によって現在も池辺寺に関わる活動が続けられている。遅 くとも明治40年(1907)に日露戦争紀念堂が建てられるより以前から組織され、廃寺後に散逸した池辺寺の仏像や寺宝類の買戻し・寄贈・修復をおこなってきた。「池辺寺跡財宝管理委員会」という名称は昭和10年(1935)ごろから使われている。現在は主に財宝の管理とともに、毎年9月10日の観音祭を執り行い、仏像の供養や公開、子供や地元の人たちへの教育・普及活動を行っている。長きにわたるこうした活動が評価され、平成15年(2003)には熊本県文化財功労者、平成20年(2008)には国より地域文化功労者として団体表彰を受けている。